

豆狸の寝言

副会長 三原幸二

去年の暮れ、久しぶりに家族四人で食事をしようということになった。夜七時に、ホテルのロビーで待ち合わせた。

私は、去年から洋電社の社員になっている長男と一緒にホテルへ行った。その日は幸い六時に退社することができ、六時半に着いた。待たせることが多いので、「よかった」と思った。が、ちょっと早過ぎた。「いや、来ているかもしれない」と思い、ロビーへ行った。だが、妻も次男もいなかった。

十分ほどたったが、まだ来ない。どうしたんだろう。降りる駅を間違えたのかもしれない。「お食事券」を忘れて、取りに帰ったのかもしれない。約束の時間までまだ二十分もあるのに、そんなことが気になり出した。

さらに十分が過ぎた。——ひょっとしたら、「胃薬を持ってくるように」頼んでいたので、買いに行っているのかもしれない。いろんな思いが頭をよぎる。長男に言うと、「なんでそんな心配するの？」と笑う。

そのあともいろんなことが気になって、やきもきしたが、妻と次男は結局、約束の五分前にやって来た。

妻にその話をすると、また長男が「心配しすぎや」という。「心配してくれる人間がいるのは幸せなんだぞ」と私は言ったが、私のこの“心配”はどこから来ているのだろうか。



たぶん、私は人を待つのが苦手なのだ。とって、待たせるのは、もっと困る。いつか、三人の友人を十五分ほど待たせたことがあった。その時、一人から「君は十五分待たせたと思っているかも知れんが、三人合わせて四十五分の時間を無駄にした」といわれて恐れ入ったことがある。親父からも、「時間に遅れるのは、信用を落とす第一歩」とよく言われたものだ。まったく同感で、私も自戒しているが、それでも時々遅れることがある。

そんなこんなで、私は「待つ時間・待たせる時間」に対して、少々過敏になっているのかもしれない。

(待つ時間・待たせる時間)